

価値観として解釈する名前：名前を通して観察する親の希望

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ*¹

Interpreting names as values: Observing parents desires for children through names

UNSER-SCHUTZ, Giancarla

Abstract

Recent changes in naming practices in Japan have been poorly received by the public, leading some to doubt parents' good intentions. However, there is little reason to believe that parents purposefully choose names they believe may harm their children. To examine parents' motivations behind their chosen names for their children, this study reports on an examination of 303 short messages in one Japanese municipality's newsletter from parents on how they chose their children's names. Although many children's names used kanji (Chinese characters) in ways that made them likely targets for recent criticism, parents seemed to focus more upon the phonetic forms of names than their orthographic forms when selecting what to name their children and how to write them. In addition, many of the images associated with the names which were noted by parents related to the creation of positive ties with others in the community, such as that they chose the name hoping that the child would be considerate of others. Rather than being completely insensitive to the public/private spheres, parents instead appear to be conscious of the public sphere when choosing names; however, it can be hypothesized that they feel that the orthographic form of names is part of the private sphere. If this were the case, it would explain why parents emphasize that the more public phonetic forms of names are easily accessible by others but seem less conscious of the potential burden of unusually written names.

[Keywords] onomastics, naming practices, kanji, trends, ideals for children

キーワード：命名、名付け習慣、広報誌、漢字、流行、子どもに対する理想

序 論

我々は様々な社会文化的背景の中で子どもの名付けをする。名前がどのような役割を持っている、名前にはどのような社会的な役割があるのかという信念に加え、誰が名付けに参加すべきなのか、名前がどのような価値観を反映すべきなのが、名付けに影響をもたらす重要な信念である。いうまでもなく、社会と文化が変化するに伴い、そういった信念も異なっていき、その結果として名付けの価値観と、名前そのものが世代によって異なる。現代の日本はそうして変化した社会の典型例である。女性の典型的な名前を聞くと、「花子」や「良子」と答えられることが多いだろうが、実際に「花子」や「良子」という名前はほとんど見られない。1920年代では、「子」の付く名前が全女性名の90%を占めたのに、近年ではその傾向が去り、ほとんど見られなくなっていることが幅広く報告されている（橋本・井藤, 2011; Komori, 2002）。

日本の名付け研究において貴重な資料である明治安田生命の赤ちゃんの人気の名前の報告によると、1920年代では「子」の付く名前が人気の女性名の上位10位をすべて独占したのに対し、2000年以降は「子」の付く名前が人気の女性名の上位10位に7回しか入っておらず、どれも「莉子」であった（明治安田生命, 2018b, 2018a; Unser-Schutz, 2016a）。男性の名前も変わりつつあり、誕生順を表す名前（「太郎」「次郎」）がほとんど見られなくなっている（本田, 2005）

* 1 立正大学心理学部准教授

他、男性名の止め字（名前の最後に来る字）もなくなっているといわれている（Komori, 2002）。その一例として、「郎」が1989年以降明治安田生命保険の上位10位に入っていないことが挙げられる（Unser-Schutz, 2016a）。その代わりに、これまでの名前と比べて読みにくい名前が増えているようである。

筆者が他に報告しているように（Unser-Schutz, 2016b）、名前における変化が大衆メディアから学術研究までという幅広い分野より注目を浴びており、こういった変化が個性に対する新しい評価とかかわっている見方がある（小林, 2009）。核家族化と少子化にともない、子どもの名づけにかかわる人物（親以外の親族、コミュニティ）が少なくなっていることや（Unser-Schutz, 2017）、少子化につれて家族に生まれてくる子どもの数が少なくなってきたこと、そして、一人ひとりの名付けに重きを置く傾向につながっていることも（田原, 2008）、変化の理由として挙げられている。

一方で、「個性」を重視し過ぎたことに対する批判として、新しい名前を付けた親が、子どもの名前を読まないといけない周辺の負担を考えていないと主張する声も見られ、読みにくい名前を付けた親の知性に対して疑問視する傾向も見られる。こういった見方は、新しい名前とこれまでの名前の差によるものであり、とくに新しい名前が読みにくいと思われる形で漢字を用いるものが多い（佐藤, 2007；徳田, 2004；Unser-Schutz, 2017）。新しい名前が悪影響をもたらすという見方が牧野（2012）の『子供の名前は危ない』の題名によって表象されているが、その結果として新しい名前は、「嗜好」の変化として受け止められず、より大きな社会問題の表象として受け止められていることが読み取れる。

しかし、Unser-Schutz（2016b）でも論じたように、親が新しい名前を付けていることが子どもの最良をないがしろにしていると思うのは、行き過ぎた批判ではないであろうか。子どもの福祉を考慮しない親もいるだろうが、そうした人は大半ではなく、ごく少数であろう。しかし、新しい名前がこれだけ普及している中、これまでとは異なる類の名前を付けることが、子どもの福祉を考慮していないことを意味しているのであれば、大半の親が子供のことをないがしろにして名前を付けていることになる。そのため、過半数の親が、子どもが苦勞するであろうと想像して新しい名前を付けたのではなく、子どものことを第一に考えて子どもの名前を付けたと考えた方が、妥当であろう。そうすると、新しい名前を批判する人が想像していない形で、子どもの福祉を考慮し、名前を付けているという考えにも至る。よって、親が何を重視して名前を付けたのかを観察することにより、読みにくい名前が増加している背景に対する理解が深まるであろう。上記を踏まえ、本論では広報誌におけるメッセージを抽出したコーパスを用い、(1)親が、名前を付ける際に何を重視するのか、(2)親が、子どもに何を望んでいるのかを考察する。

方 法

本研究では佐藤（2007）の前例に従い、自治体の広報誌における名付け情報を抽出した。現在、日本のほとんどの自治体が、イベントの通知や情報の共有という目的で広報誌を発行している。自治体のコミュニティのメンバーの親睦を深める目的もあり、市民に関する情報コラムを連載することが多い。その中に自治体で生まれた子どもの出生告知欄や、写真とともに子どもの親からの手紙を紹介する「我が家のアイドル」といった名のコラムもある。佐藤（2007）が広報誌の可能性を指摘し、Unser-Schutz（2018）では全国の自治体の広報誌を対象に調査を行い、その有効性を示した。調査の結果、対象だった広報誌の半数に子どもの名付け情報を含むコラムが掲載されていることが分かり、さらにその大半に子どもの性別・名前の読み方が表示されていることが明らかになった（全国の自治体の約50%が対象、そのうちの約50%に該当するコラムが連載）。広報誌における名付け情報を抽出すれば、各地方における名付け傾向の比較が可能となることも示された（Unser-Schutz, 2017）。

本研究では、子どもの名前を付けた理由を明記するメッセージを含む北海道の乙部町の広報誌に限定した。上記の調査では、子どもの由来や名前の選択を明らかにしたものはその他になく、その意味では大変貴重な資料である。乙部町の人口は2018年10月末の時点で3,737人（男性：1,724人、女性：2,013人；合計：世帯数：1,891戸）となっている（乙部町役場, 2018）。2010年では、14歳未満の子どもと65歳以上の高齢者がそれぞれ人口の11.23%・34.39%を占め（乙部町総務課企画係, 2010）、日本の多くの自治体と同様に町が高齢化している。本研究で用いたコラムは、「我が家のアイドル」という名前で掲載されており、各子どもに対し親と子どもの名前、子どもの年齢、名前の由来と両親の願いという事項から構成されている。Unser-Schutz（2017b）では名付けへの参加者として挙げられた人物に着目して、名前の由来に関するメッセージを、現代における家族関係の考察に用いたが、本研究では同メッセージにおいて挙げられた理由を分析することを通して、親の子どもに対する希望の究明を試みた。

具体的に対象は2004年4月から2018年12月までの15年弱年分の広報誌で、その中から309通のメッセージを抽出した(図1)。そのうち、双子・三つ子に対する重複的なメッセージが6通で、対象から除外したため、メッセージのサンプル数は303通、子どもの名前が309個となった。名付けの理由に関するキーワードによって抽出したメッセージをコード化し、分析を進めた。近年の名前に対する批判と名付ける際に重視する特徴の関係を明らかにするために、ことに名前選びの際、(1)名前のどの部分(音声・表記)に着目するのか、問題として挙げられることが多い読みやすさ(読みにくさ)が指摘されるか、(2)名前のユニークさを重要な特徴として挙げられるか、(3)その他、名前を選んだ理由がとくにあげられるのかを分析する。上記を通して、名前を選ぶ際に価値観の変化を示す特徴が見られるのかを考察する。

わが家のアイドル



| | | | |
|--|---|---|---|
| <p>お父さん＝ 田畑 孝典さん</p> <p>お母さん＝ 麻衣子さん</p> <p>わたしは 1歳4ヶ月の女の子です。</p> <p>名前の由来＝ すずという言葉の響きが可愛かったので、それに合う漢字をあてました。</p> <p>両親の願い＝ ただ元気に成長してくれたら、それだけで幸せです。</p> |  | <p>お父さん＝ 菊池 善朗さん</p> <p>お母さん＝ 敦子さん</p> <p>わたしは 1歳4ヶ月の男の子です。</p> <p>名前の由来＝ 皆から呼ばれやすい響きと明るい未来が開けるように。</p> <p>両親の願い＝ のんびりと健やかに、皆から愛される人になってほしい。</p> |  |
| | <p>すず 涼 (滝瀬)</p> | | <p>もんじ 門次 (花磯)</p> |

図1 乙部町の「わが家のアイドル」からの一例(乙部町総務課企画係, 2015のコラムを再現されたもので元はUnser-Schutz, 2017bで掲載; クリップアートは<http://www.fumira.jp/>より)

結果と考察

名前選びと表記の選択

表1に示されているように、表記に関連する最も頻繁に指定された要素は、画数であった(37.95%・例1)。画数は、姓名占いにおいて参考にされることが多く、住職に依頼した、または占いの結果を重視したというコメントはなかったものの、漢字の他の特徴よりも、子どもにとっての運が良いとされる画数の名前を選ぶことがどれ程重視されているのかが読み取れるであろう。姓名占い・姓名判断の歴史はさほど長くはない(小林, 2008を参照)が、今も重視されることが确实である。画数に次いで、名前の表記の読みやすさや書きやすさを、名前選びの理由として挙げるメッセージが少なかった。その例外の一つを例2に示す。その他に、漢字の意味やイメージに触れたメッセージがその他に20通であった。

表1 名選びの理由として挙げられた表記に関する特徴（全メッセージにおける割合が高い順）

| 名付けの理由 | 子どもの性別（個数・対象性別内の全名前前の%） | | | | 合計 | |
|--------|-------------------------|--------|-----|--------|-----|--------|
| | 女性名 | | 男性名 | | | |
| 画数 | 53 | 34.19% | 62 | 41.89% | 115 | 37.95% |
| 音声形 | 61 | 39.35% | 51 | 34.46% | 112 | 36.96% |
| 願い* | 35 | 22.58% | 47 | 31.76% | 82 | 27.06% |
| イメージ† | 47 | 30.32% | 29 | 19.59% | 76 | 25.08% |
| つながり‡ | 39 | 25.16% | 35 | 23.65% | 74 | 24.42% |
| 表記形 | 35 | 22.58% | 37 | 25.00% | 72 | 23.76% |
| 呼びやすい§ | 26 | 16.77% | 15 | 10.14% | 41 | 13.53% |
| 書きやすい | 1 | 0.65% | 3 | 2.03% | 4 | 1.32% |
| 候補リスト | 2 | 1.29% | 1 | 0.68% | 3 | 0.99% |
| 読みやすい | 0 | 0.00% | 2 | 1.35% | 2 | 0.66% |
| 命名本¶ | 1 | 0.65% | 1 | 0.68% | 2 | 0.66% |

注) * 願い：願いを込めて選んだ、† イメージ：意味や名前のイメージで選んだ、‡ つながり：家族等の名前からの一部や好みで選ばれた、§ 呼びやすい：予め用意した候補リストの中から選んだ、¶ 命名本：命名に関する本を参考にした

例1：「2文字の名前の響きでりくと決め、字画で漢字を決めました。」（乙部町総務課企画係，2014a，p.13）

例2：「それぞれの漢字がもつ意味やよみやすさなどを考え両親で決めました。」（乙部町総務課企画係，2014b，p.5）

一方で、名前の音声的な特徴が非常に重視される傾向が見られ、響きが気に入ったから・響きがよかったというように音声形に触れたメッセージが、112通（36.96%）であった。例1のように、響きを先に決めてから文字を別の基準（画数やイメージ）で選択したというメッセージも見られた（41通，13.53%・表2）。関連して、呼びやすさを理由として指摘したメッセージは41通（13.53%）見られた。例3がその典型的な例である。興味深いことに、メッセージの全数を算出すると画数を指定したメッセージは比較的高い結果となるが、画数のみを参考にした、または画数を最初の決め手として挙げたメッセージがほとんどなかった。その意味では、画数は重要だが、「画数が許せる範囲内で、書き方が気に入られたもの」という選択の道ができていていることが明らかである。

表2 名前選びの際に重視した要素の順番（全メッセージにおける割合が高い順）

| 要素で名前が選ばれた順番 | 子どもの性別（個数・対象性別内の全名前前の%） | | | | 合計 | |
|--------------|-------------------------|--------|-----|--------|----|--------|
| | 女性名 | | 男性名 | | | |
| 複数要素* | 32 | 20.65% | 31 | 20.95% | 63 | 20.79% |
| 願い†のみ | 22 | 14.19% | 23 | 15.54% | 45 | 14.85% |
| つながり‡→その他 | 21 | 13.55% | 17 | 11.49% | 38 | 12.54% |
| 表記形→その他 | 13 | 8.39% | 21 | 14.19% | 34 | 11.22% |
| 音声形→その他 | 16 | 10.32% | 13 | 8.78% | 29 | 9.57% |
| イメージ§→その他 | 10 | 6.45% | 10 | 6.76% | 20 | 6.60% |
| つながりのみ | 10 | 6.45% | 10 | 6.76% | 20 | 6.60% |
| イメージのみ | 12 | 7.74% | 4 | 2.70% | 16 | 5.28% |
| 願い→その他 | 7 | 4.52% | 6 | 4.05% | 13 | 4.29% |
| 音声形のみ | 6 | 3.87% | 6 | 4.05% | 12 | 3.96% |
| 画数のみ | 0 | 0.00% | 3 | 2.03% | 3 | 0.99% |
| 候補リスト のみ | 2 | 1.29% | 1 | 0.68% | 3 | 0.99% |
| 表記形のみ | 2 | 1.29% | 1 | 0.68% | 3 | 0.99% |
| 画数→その他 | 1 | 0.65% | 1 | 0.68% | 2 | 0.66% |
| 命名本¶のみ | 1 | 0.65% | 1 | 0.68% | 2 | 0.66% |

注) * 複数要素：複数の要素が同列的に挙げられた、† 願い：願いを込めて選んだ、‡ つながり：家族等の名前から一部や好みで選ばれた、§ イメージ：意味や名前のイメージで選んだ、|| 候補リスト：予め用意した候補リストの中から選んだ、¶ 命名本：命名に関する本を参考にした（その他に主たる要素のすべてをまとめている）

例3：「誰からでも呼びやすい名前にしようと思い、お母さんの字を1文字使って決めました。」(乙部町総務課企画係, 2017a, p.15)

名前選びと個性

本調査で対象とされた名前は、全体的に個性に富み、まったく同一の読みと表記の組み合わせの名前がほとんど見られなかった(異なる名前の全297個中9個・表3)。全309個の名前で、音声形が異なる名前は242個で、そのうち44個が複数回見られた。一方で表記形が異なる名前は294個で、そのうち12個が複数回見られた。全国的な名付け傾向を検討したUnser-Schutz(2017a)と同様な結果となり、音声形の出現頻度は高いが、全体的に同じ名前の子どもの数が少数であることは確かである。しかし、名前が個性的であることを選ぶ基準として明確に指摘したメッセージは4通のみであり、それが理由として指摘されることは稀であった(例4)。関連するものとして、「両親の想い」のメッセージでは自分らしさを取り上げたものが2通あったことより、親が子どもの個性を重視していると解釈できるものの、個性に対する欲求が、名前を選ぶ意識的な理由にはなっていないようである。なお、例5と例6から読み取れるように、古風であることに対する評価が統一しておらず、一方でよいとする親もいれば(例5)、古風であることが望ましくないことを示唆する親もいる(例6)。だが、そもそも名前には「古風さ」が感じられることが、やはり親の名付けには傾向があること、またその傾向が、Lieberson(2000)の論じる通り、一種のファッション的流行でもあることに対する理解を示している。

表3 名前の表記上の特徴

| 名前の特徴 | 子どもの性別 (個数・対象性別内の全名前の%) | | | | 合計 | |
|-------------------|-------------------------|---------|------|---------|-----|---------|
| | 女性名 | 男性名 | 合計 | 割合 | | |
| 通常ではない読みまたは組合せ* | 94 | 60.26% | 73 | 47.71% | 167 | 54.05% |
| 通常な読みまたは組合せ† | 62 | 39.74% | 80 | 52.29% | 142 | 45.95% |
| 総計 | 156 | 100.00% | 153 | 100.00% | 309 | 100.00% |
| 音声形が異なる名前 | 126 | 125 | 242‡ | | | |
| 表記形が異なる名前 | 147 | 148 | 294‡ | | | |
| 音声形と表記形の組合せが異なる名前 | 149 | 148 | 297‡ | | | |

注) * 通常ではない読みまたは組合せ：当て字や読まれない漢字(通常の音訓が変形した読みのおよび音と訓が混ざった名前を含む)、† 通常な読みまたは組合せ：通常の読みで読まれ、音訓が混ざっていない名前(仮名表記を含む)、‡ 性別関係なく異なる名前を示す

例4：「お姉ちゃんと1文字違いの名前にというお父さんの想いと、才能や魅力的な個性を持ち、思いやりと人徳のある人という願いをこめました。」(乙部町総務課企画係, 2017b, p.7)

例5：「古風な名前にしたかったので、男の子だとわかったときから決めていました。」(乙部町総務課企画係, 2012, p.8)

例6：「パパのひらめきで「ちよ」に決定。古風すぎると思い「り」を付け加えました。」(乙部町総務課企画係, 2009, p.5)

名前選びと子どもに対する希望

他者と良好な関係作りを強調したメッセージが比較的多かった(表4)。呼びやすさは、名付けられた本人よりも、当人を呼ぶまわりの人の視点を取り入れているため、この傾向の一部であろう。19通に挙げられた「かわいい」という特徴は、女子の名前選びの理由としてのみ挙げられたが、人間関係を重用しているものとして解釈することができる。「かわいい」と言われれば、外見的な特徴を想像する傾向があるが、かわいいものは人に特定な反応を起し、本能的に無視することができない(Nittono, Fukushima, Yano, & Moriya, 2012)。その意味では、「かわいくなってほしい」ことが、まわりに構ってほしいという関係作りを重視したものだと考えられる。類似したもので、子どもの性格に求められた特徴として、その他に、「優しい」(13通)、「元気」(6通)、「思いやり」(2通)等が挙げられる。集団内の共感ともいえる「思いやり」は、日本のコアな感情だとも言われており(Travis, 1998)、個人内に留まるものではなく、他者との行為を通して表現される特徴である。その点で、「思いやり」が頻繁に見られるのも、やはりまわりの人々との好適な関係

作りに働いているといえるであろう。同様に、「愛しく」なり、まわりから「愛される」ように願っていることを、名前の選択理由として挙げたメッセージも7通あった（例7）。

表4 名選びの際に重視されたイメージに関する特徴（全メッセージにおける割合が高い順）

| イメージ | 子どもの性別（個数・対象性別内の全名前の％） | | | | 合計 | |
|----------|------------------------|-------|-----|--------|----|-------|
| | 男性名 | | 女性名 | | | |
| 可愛い | 0 | 0.00% | 19 | 12.84% | 19 | 6.27% |
| 愛しい・愛される | 2 | 1.29% | 5 | 3.38% | 7 | 2.31% |
| 優しい | 8 | 5.16% | 5 | 3.38% | 13 | 4.29% |
| 元気 | 4 | 2.58% | 2 | 1.35% | 6 | 1.98% |
| 強い | 2 | 1.29% | 2 | 1.35% | 4 | 1.32% |
| たくましい | 4 | 2.58% | 0 | 0.00% | 4 | 1.32% |
| 明るい | 6 | 3.87% | 5 | 3.38% | 11 | 3.63% |
| 思いやりがある | 2 | 1.29% | 0 | 0.00% | 2 | 0.66% |

例7：「誰からも愛されるようになってもらいたく、字画を調べてつけました」（乙部町総務課企画係，2013，p.7）

結 論

上記の結果をまとめると、名前を選ぶ際に最も重視するのはその音声形であり、音声形が選ばれた後のみ、表記形が初めて選択される傾向が強い。漢字に、一つ一つ唯一無二だと感じられる傾向があることは、名前の使用に認められている漢字（いわゆる人名用漢字）が増加している理由として挙げられる（円満字，2005）が、画数で選別する傾向が強いことより、「子どもにとって最良＝最幸運の名前」を付けることが、個別の漢字へのこだわりより重視されていることを示唆する。これらの点を踏まえ、表記形が一般に思われているほど重視されていない、あるいはこれまで言われてきた通りとは異なる形で受容されていると考えられる。

また、読みやすさを明記するほど重視した親がいなかったものの、音声形を決める際に、その呼びやすさを重視する傾向に注目されたい。冒頭でも観察したように、近年の名前が読みにくくなっていることより、新しい読みにくい名前と、読みにくい名前を付ける親を批判する傾向があることは確かであり、他者にとっての読みやすさを重視することが稀だったことにだけ着目すれば、本調査の結果がやはりまわりの人の負担を考えない親が多いという主張を支持するようである。しかし、この解釈も、「相手の負担」を単純化したものである。名前は音声形と表記形からなるからこそ、それぞれの活躍の場や、組合せの仕方に着目しない限り、「読みにくい」だけで、果たして他者にとってそれほど負担になるといえるのか断言できない。

本研究に活用したデータには明らかな弱点もある。第一に、対象データを抽出したコラムが任意的なものであり、投稿する義務や決まった時期に参加する要件等がとくにないため、広報誌に自身の子どもの写真とメッセージを投稿した親が、自らそうしたと考えた方が妥当であろう。そのため、本コラムに投稿された親が元々コミュニティに対する意識が高く、積極的な方だとも考えられる。本研究の結果として、他者を意識する傾向が高いことが示されたが、自ら投稿することを拒否した親の名付け理由がまた異なるものだったかも知れない。第二に、本コラムはあくまでも事後的なものであり、名付けをする前の段階、または名付けの途中に書かれたものではない。生まれてきた子どもとの新しい生活の中で、名付けの理由と過程が美化されている可能性がある。第三に、本研究のデータは公的なものであるからこそ、自らの検閲が行われている可能性もある。同コミュニティの他のメンバーにどう見られるのかという意識の元で、他の人も認めてくれそうな理由のみ公開する人も多いであろう。とくに当該メッセージが短いものであるため、詳しく述べることも許されない中、家族だけのよりプライベートの理由も他にあることが多いことが十分に考えられる。

それでも、本研究によって得られた洞察も多い。まず、名前そのものが個性的であっても、親が子どもと家族内外のコミュニティとの関係性を重んじる傾向にあることが明らかになったことより、公共圏に対する意識が高いところが示唆されている。また、名前の重複が少なく、対象のほとんどの子どもが互いに異なる名前であることより、個性が重視されていると予想できる一方、個性が理由として挙げられていないことが、興味深い。一つの可能性は、個性というも

のが望ましいと感じながらも、上記の問題点で述べたような実態が生じている可能性がある。つまり、他者にはアピールしてもよいものではないと感じられているため、自己検閲を行っている可能性も考えられる。一方で、個性を重視していることがさほど意識されていないという可能性もある。

今後の課題として、名前自体が個性的であるのに、個性的であることを重視したと答えていないことを検討する必要がある。つまり、まわりを配慮しているようにも見える親が、なぜ読みにくいと思われる名前を好んで選んでいるのか、この問題に直面することが重点である。一つの可能性は、公共圏における名前の表記形と音声形の機能と役割が異なると見なされていることである。呼びやすさが重視される傾向が見られたが、呼びやすさが問題視されるのは、言うまでもなく他者とのやり取り、つまり対面的な相互行為である。対面コミュニケーションが、ことに公共圏において重要であることが明確なことである。このことを踏まえ、音声形が、公共圏に依拠する意識が高い可能性もあろう。

自己紹介の際、名前の書き方を説明することもあるが、基本的に口頭で名乗りをし、後日連絡の取り合いが必要になった場合のみ、名前の書き方を説明することになる。名前を聞いただけで、本人にとっての「正しい」書き方が必ずわかるということは、近年の名前だけではなく、日本人の名前の一般的な特徴である。疑問があれば、「ささきゆうこ」と言われれば、それが「笹木」「佐々木」「佐崎」「佐々城」のどれなのか、「夕子」「裕子」「優子」「悠子」のどれなのか、どうやって分かるのかを考えてみるとよい。当然、クラス名簿や電子コミュニケーション等において、音声型より先に表記型に触れることもあるが、この場合は逆に、音声型を知る必要はとくになく、読み方が分からなくても漢字が打てることを考えては、とくに問題はない。その意味では、公共圏における他者とのやり取りにおいては表記形がそれほど重要ではないため、音声形と比べ、表記形がより私的だという意識がある可能性は十分にあり得る。実際に、音声形には比較的多様性が少ないことが、この裏付けである。つまり、他者とのやり取りにおける重要性を意識した結果だとも推測できる。新しい名前の普及と、近年における個性に対する意識の関係を検証するためには、名前における公共圏の役割に関する調査をすることが重要であろう。

引用文献

- 円満字二郎 (2005). 人名用漢字の戦後史 岩波書店
- 橋本淳治・井藤伸比古 (2011). 「子」のつく名前の誕生 仮説社
- 本田明子 (2005). 赤ちゃんの名付け 日本語学, 24(12), 54-62.
- 小林康正 (2008). 姓名学の誕生：大衆新聞の登場と読むことの想像力を中心に 京都文教大学人間学部研究報告, 10, 87-113.
- 小林康正 (2009). 名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク 風響社
- Komori, Y. (2002). Trends in Japanese first names in the twentieth century: A comparative study 国際基督教大学学報 III-A アジア文化研究, 28, 67-82.
- Lieberson, S. (2000). *A Matter of Taste: How Names, Fashions, and Culture Change*. New Haven: Yale University Press.
- 牧野恭仁雄 (2012). 子供の名前が危ない ベストセラーズ
- 明治安田生命 (2018a). 名前ランキング2018—生まれ年別名前ベスト10—女の子 明治安田生命 (2018年11月26日) <https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/girl.html> (2019年1月16日)
- 明治安田生命 (2018b). 名前ランキング2018—生まれ年別名前ベスト10—男の子 明治安田生命 (2018年11月26日) <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/boy.html> (2019年1月16日)
- Nittono, H., Fukushima, M., Yano, A., & Moriya, H. (2012). The power of *kawaii*: Viewing cute images promotes a careful behavior and narrows attentional focus. *PLoS ONE*, 7(9), e46362.
- 乙部町総務課企画係 (2009). わが家のアイドル 広報おとべ, (478), 5.
- 乙部町総務課企画係 (2010). 第1次基本集計結果 乙部役場 (2010年3月19日) <<http://www.town.otobe.lg.jp/section/kikaku/e0taal0000000fnc-att/e0taal0000000npq.xls>> (2016年11月21日)
- 乙部町総務課企画係 (2012). わが家のアイドル 広報おとべ, (518), 8.
- 乙部町総務課企画係 (2013). わが家のアイドル 広報おとべ, (531), 7.

- 乙部町総務課企画係 (2014a). わが家のアイドル 広報おとべ, (537), 13.
- 乙部町総務課企画係 (2014b). わが家のアイドル 広報おとべ, (540), 5.
- 乙部町総務課企画係 (2015). わが家のアイドル 広報おとべ, (553), 8.
- 乙部町総務課企画係 (2017a). わが家のアイドル 広報おとべ, (573), 15.
- 乙部町総務課企画係 (2017b). わが家のアイドル 広報おとべ, (579), 7.
- 乙部町役場 (2018). 北海道乙部町 乙部役場 (2018年2月4日) <<http://www.town.otobe.lg.jp/>> (2018年12月5日)
- 佐藤稔 (2007). 読みにくい名前はなぜ増えたか 吉川弘文館
- 田原広史 (2008). 人名 宮地裕・甲斐睦朗 (編) 「日本語学」特集テーマ別ファイル：意味〈2〉命名 / 言語感覚 明治書院 pp.40-48.
- 徳田克己 (2004). 名づけの心理 2：読みにくい名前の分析 日本教育心理学会総会発表論文集, (46), 623.
- Travis, C. (1998). *Omoiyari* as a core Japanese value: Japanese-style empathy. A. Athanasiadou & E. Tabakowska (Eds.), *Speaking of Emotions: Conceptualisation and Expression* (pp. 55-83). Walter de Gruyter.
- Unser-Schutz, G. (2016). 現代日本における名付け事情とその変遷—ジェンダーという側面から 立正大学心理学研究所紀要, 14, 88-99.
- Unser-Schutz, G. (2016b). Naming names: Talking about new Japanese naming practices. *electronic journal of contemporary japanese studies*, 16(3), np.
- Unser-Schutz, G. (2017a). Evaluating contradictory hypotheses on the effects of regional differences in the selection of novel naming patterns in Japan. *Orientaliska Studier*, (147), 55-74.
- Unser-Schutz, G. (2017b). 名前に鑑みる家族関係：名前の由来に関する一考察 立正大学心理学研究年報, 8, 39-50.
- Unser-Schutz, G. (2018). 資料として日本の名付けに関する研究に広報誌を用いる可能性について 立正大学心理学研究年報, 9, 23-35.